

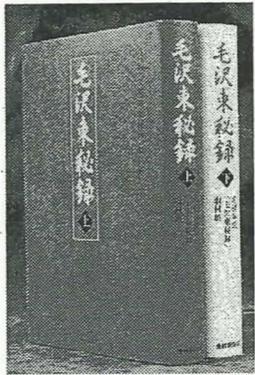
ベストセラー快読

■橋爪大三郎■

天安門広場を埋めつくす百万人の紅衛兵に、手を振ってこたえる毛沢東。劉少奇国家主席の失脚→林彪のクーデター未遂→江青ら四人組逮捕と続く、激動の文化大革命十年の幕開けだ。
共産革命で成立したはずの中華人民共和国の政府と共産党を、攻撃せよと党主席の毛沢東が命じた。なぜこんな奇妙な「革命」が起きたのか。文革に熱狂した大衆がなぜ後では、改革開放路線を支持したのか。疑問はつきない。
中国で最近、ようやく続々出版されるようになった当時の証言や実録約二百五十冊を、毛沢東という人物に焦点

『毛沢東秘録 上・下』

産経新聞「毛沢東秘録」取材班著



をあてて編み直したのが本書である。これまで知られていなかった内容も多い。けれどもそうした断片をつなげると、巨大な隣国・中国のもうひとつの素顔が浮かびあがってくる。中でも圧倒されるのは、政治の舞台裏に渦まき、権力闘

権力闘争の軌跡くつきり

争のすさまじさだ。生き残りの争のすさまじさだ。生き残りをかけて敵と手を結び、腹心を切り捨てる。そして、毛沢東の底知れない恐ろしさは、いつも複数の勢力を争わせて、自分の地位を脅かすとみれば容赦なく打倒することだ。
毛沢東が指導した無謀な大躍進政策が失敗すると、劉少奇・鄧小平ら実務派が後始末に乗り出し、毛沢東の出番が減った。折からフルシチョフがスターリンを批判。毛沢東は自分も死後批判され、革命の成果が無に帰すのではと恐る。そこで党内から修正主義を打ち出す。同紙は、文革に好意的な報道が多かったなか、これを権力闘争と断定して、

『毛沢東秘録』は

(扶桑社発売、上374頁・下390頁・各1,619円) 上巻は99年8月30日発売8刷15万5千部、下巻は11月20日発売3刷13万部。上巻出版後の問い合わせの多さに、担当編集者は「中国好きの読者層の厚さを実感した」そうだ。本書の取材班は昨年菊池寛賞受賞。

中国政府に北京支局閉鎖を命じられた。以来三十一年間、一昨年再開するまでの空白を取り戻そうとする取材班の意気込みが、迫真のドキュメントに結実した。(社会学者)

ベストセラー快読

■橋爪大三郎■



教師志望の大学生九人が、ボランティアとして中国・敦煌の小学校の教壇に立つ。思い立ってから四月あまり、ついに授業を成功させるまでの感動の記録である。
著者・大橋功氏は、長年の教師経験を活かし、いまは仏教で美術教育を教える。同大学が、敦煌に小学校校舎を寄付した平山郁夫画伯の展

『教師をめざす若者たち』

大橋 功著

教えることは、適性とは？

覽会を催したのが縁で、大橋の風が揚がる日。言葉の壁をゼミの学生たちが、このプロジェクトを思いついた。
本書は、山田太一氏脚本の「ふぞろいの林檎たち」のよらな集団ドラマだ。純粹だが傷つきやすく、自分をさらし他者を受け入れるのが苦手なふつこの若者たちが、「シルクロードの空に和風を揚げよう」という目標に向かって、挫折を乗り越え、集団としての連帯を培っていく。ありそうでなかなかないそうしたチャンスも、読者も追体験できる。そして、大空に手づくりの

そんなことは、教育の現場とかけ離れた、たった四日間のも物語ではないかと、言えは言える。教員採用は狭き門で、この春から教職に就くのは九人のうち三人だけ。学級崩壊やいじめなど、暗い話題にはことかかない。子供の純粹さに教えられるという教師像も昔ながらで、日本の現実に無力かもしれない。
でも、こんな時代だからこそ、教師を志す若者の存在は貴重だと思ふ。彼ら自身、学校で傷ついた世代である。本書が支持されたのは、資質の

『教師をめざす若者たち』は

(プレジデント社、247頁・1,500円) 3月15日発売、7刷5万5千部。教員採用制度について担当編集者は「資質とは関係なく、地元国公立大生に比べ私立大生は圧倒的に不利でおかしい」と話す。本書は現役教師から支持を得ており、ジュンク堂書店京都店では4週連続1位。

ある教師まで押しつぶす学校の制度に、誰もが疑問をもっているからだ。彼らが和風の代わりに、新しい学校を日本で手づくりできるなら素晴らしい。(東工大教授)

2000-4-① 3/2

ベストセラー快読

■橋爪大三郎■



未婚の母として新しい命を
はぐくみながら、癌と闘う東
由多加さんを支える。壮絶な
一年を、同時進行で週刊誌に
つづった「私記」である。
よくある話と、言えなくも
ない。妊娠がわかったとたん
に男は逃げ腰となり、中絶で
きないか、妻に知れたら大変
だろうと考える。認知や養育
費の交渉も難航する。

『命』

柳 美里著

それでも出産を決意したの
は、東さんが末期の食道癌で
あと七カ月の命とわかったか
らだ。柳美里さんは高校をど
び出して、東さんの劇団・東
京キッドブラザースの研究生
となり、東さんと十年間生活
を共にした。師であり、かけ
がえのない友である東さんの
最期を看とろうと柳さんは覚
悟し、再び一緒に住むことに
する。激情に身を任せるほか
りて愛されることの手な柳
さんは、東さんに同じ孤独を
見たのかもしれない。
こうして、やがて生まれる
「丈陽君を交えた、三人の共
同生活が始まる。抗癌剤の副
作用に耐え、祈るよりに過ご
す一日一日。執筆と看病の疲
れから切迫流産しかけ、無事
出産するまでの不安と感動。
二人がかりで不慣れた赤ん坊
の入浴。互いをほんとうに必
要とする三人は、「聖家族の
ように侵しがたく思える。
著者はあえて淡々と、スナ
ップ写真のように、日常のひ
とこまや心象風景、夢の断片
を書きとめていく。これほど
切実に、濃密に時間が過ぎて
いくものかと、読者は自らを
ふりかえらざるをえない。
これは小説ではない。著者
は〈この物語〉を書くこと
で、生きていく決意を固めた
かった」という。圧倒的な現
実に、言葉を武器に立ち向か
う。全力でか弱い二つの命を
守り、自分の命も救われる。
この〈物語〉は、そんなぎり
ぎりの場で紡がれた、前例の
ないノンフィクションだ。
現実の人間関係をそのまま
〈物語〉として公表している
のかという問題がある。赤ん
坊の父親は匿名だが、写真週
刊誌の餌食になりそうだ。彼

壮絶な一年つづる私記

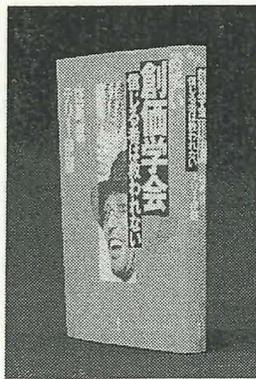
『命』は

(小学館・231円・1,238円)
6月26日発売。4刷21万部。同時進行
的にすすむ人気作家の「私記」は、週刊
ポスト連載中から大反響があった。「手
紙などもたくさん届き、読者がこれまで
以上に広がっているのを感じます」と担
当者。連載は8月中旬に再開予定。

は自業自得でも、妻は大きな
痛手を被ろう。ほかに傷つ
く人びとが大勢いるはずだ。
これ以外になかった柳さんの
必然は必然なのだが、心の痛
むことである。(社会学者)

ベストセラー快読

■橋爪大三郎■



北朝鮮、大蔵省、共産党。
「お笑い」にかこつけてタブ
ーに踏み込み、問題の急所を
とらえるテリイ伊藤氏が、今
度は創価学会を標的にした。
辛口の評論家・佐高信氏との
対談である。
創価学会、公明党への国民
のはてな?は多い。かつて反
自民連立政権、新進党に加入
り、いまは自民党と手を結ぶ

『お笑い創価学会 信じる者は救われない』

佐高 信、テリイ伊藤著

公明党のわかりにくさ。選挙
は創価学会の丸抱え、池田大
作名誉会長も絶大な影響力を
持つのは周知のことなのに、
政教分離をいう不可解。自公
連立をめぐる不安をとらえ
た、タイムリーな企画だ。
井田真木子さんの雑誌論
文を資料にはさんで、両氏の
対談が進む。これまで取り上
げられた論点も多い。いくら
批判しても、創価学会のコア
の信者は動揺しないので、頼
まれて公明党に投票する周辺
(フレンド票)をまずひきは
がそうというのが、本書のね
らいなのだという。
創価学会が池田氏を頂点と
する上意下達の組織で、一般
社会の常識からかけ離れてい
ると、両氏は批判する。重す
ぎる財務(寄付金)の負担。
池田氏をとりまく女性幹部の
大奥状態。候補者や委員長ま
で上からの指名で決まる公明
党。その通りだとすれば、戦
後民主主義社会と相いれない
のは明らかだ。
こうした批判に創価学会は
正面から向き合い、答えてほ
しいと思うが、同時に私は、
両氏の批判のスタイルにも違
和感を持った。
宗教は、一般社会の常識と
は一致しないもので、それが
値打ちである。常識のほうか
間違っていることもある。信
者がそう主張すると水かけ論
になり、その先に進めない。
常識がいつも正しく、宗教
は弱い人間だけがすがらもの
——日本人によくある誤解と
偏見だ。著者らの批判もそれ
をなぞる。しかも、成仏と天
国をこっちゃにする(百五十
六頁)など、議論が雑。創価
学会を問題にするなら、やは
り信仰の根本である日蓮正宗

タイムリーだが違和感も

『お笑い創価学会』は

(光文社・223円・1,200円)
7月25日発売。9刷21万3千部。「新
聞広告を出すかどうか」と担当
者。編集部には反響の手紙が数百通来
ており、3割が批判、7割賛同とか。

を少しは理解すべきだし、批
判も仏教の論理を踏まえるべ
きた。批判するなら本格的に
批判しつくす覚悟でないか、
批判の相手に対して失礼では
ないかと思った。(社会学者)

特集：21世紀のための500冊
 インターコミュニケーション・ミレニアム・ブックガイド
 Feature: 500 Books for the 21st Century
 InterCommunication Millennium Book Guide

09

アジアの20世紀と21世紀を考える10冊

橋爪大三郎

H A S H I Z U M E D a i s a b u r o



081

果である。

優秀で勤勉だが差別されている点で、日本人はユダヤ民族に親近感を抱く。日本民族は欧米に選ばれた選民である。アジアで唯一の軍事大国となり、経済大国となった。こうした世界認識は、ごく最近まで続いてきた。ところが、アジア四小龍の勃興、韓国・台湾の民主化、中国の台頭によって、日本以外にも選ばれた民族がたくさん出てきた。21世紀の国際社会は米中関係を基軸に動くだろう。日本のアイデンティティを揺さぶる、世界の地殻変動が起ころうとしている。

小熊英二『単一民族神話の起源』[081]は、明治以降の日本人の自己イメージを丹念に実証的に追いかけている。ここで意外にも明らかになるのは、戦前まで日本は、多民族社会だと信じられていたことだ。敗戦にともなう認識の逆転と健忘症は、戦後日本がどういう閉塞線に閉じられているのかを浮きぼりにする。

自滅への日本の軌跡を、外からまた内から、乾いた筆致で描くのが、入江昭『太平洋戦争の起源』[082]と、猪瀬直樹『昭和16年夏の敗戦』[083]である。ここでもまた、アジアにも欧米にも閉じられた生存圏を夢想する運動とその挫折の必然が、くっきりと照射されている。いっぽう東野真『昭和天皇 二つの「独白録」』[084]は、日本占領と戦後改革の原点ににをみるべきなのかを、的確な資料発掘で裏づけている。

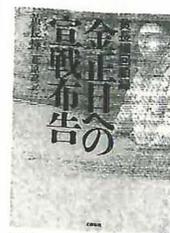
いっぽう、ポスト冷戦時代の国際社会の権力の空白に、過去の日本の記憶のようにこびりついて日本を脅かしているのが、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の脅威である。亡命した書記、黄長燁の『金正日への宣戦布告』[085]は、独裁国家・北朝鮮の成立の秘密や権力者の実像を、あますところなく暴いている。黄書記は日本の大学を中退し、モスクワに学んだ哲学者。その「主体」理論にも、金日成→金正日への権力継承にも、軍部を中心とする権力にも、天皇制の影が見えかくれている。かりに北朝鮮が近い将来に崩壊するようなことがあれば、その余波をどれだけ被るか、覚悟が必要だ。李佑泓『どん底の共和国』[086]は、北朝鮮ものの古典と言うべき労作。恵谷治『北朝鮮解体新書』[087]は、一冊あるとわかりやすい北朝鮮の実態の図解版である。

巨大な隣国・中国の足跡も知られる必要がある。ユン・チアン『ワイルド・スワン』[088]はいまさら説明する必要もないベストセラー。文革の真実の姿とともに、そこに明らかにされている中国社会の実像を、われわれは繰り返しみつめるべきだ。産経新聞取材班の『毛沢東秘録』

明治以降の日本近代化は、劣等感と自尊心をミックスした、不思議な心性を日本人に植えつけた。あるときは劣等感が表に出て、ひたすら外国を崇め、あるときは自尊心が表に出て、もはや外国に学ぶ必要はないとうそぶく。ほんとうは強くないのに強がるので、弱いものを前にするとヒステリックな加虐意識にとられることもある。富国強兵、脱亜入欧をスローガンとしたことの、必然的な結果である。

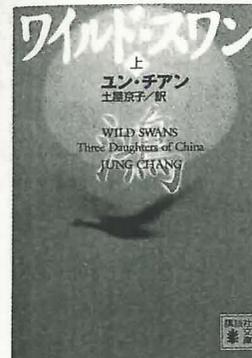


084



085

はしづめ・だいさぶろう——1948年神奈川県生まれ。社会学者。東京工業大学教授。著書『言語ゲームと社会学理論』(勁草書房)、『はじめての構造主義』(講談社現代新書)、『性愛論』(岩波書店)、『橋爪大三郎の社会学講義』1・2(夏目書房)、『選択・責任・連帯の教育改革——学校の機能回復をめざして』(共著、勁草書房)など。



088

[089]は、最近中国で発表されている実録ものを集大成した便利な一冊だ。冷酷な権力闘争の現実と鄧小平の改革開放路線登場の意味するところが、しっかりと描かれている。余裕があれば、王輝『中国官僚天国』(橋爪大三郎ほか訳、岩波書店)を読めば、社会主義中国の指導層の実態にさらされることできる。

台湾について、日本人の理解はますます乏しい。岡田英弘『台湾の命運』[090]は、台湾の国際法上の地位と独立問題について、思い切った説明を与えている一冊だ。アメリカの対中政

策は、台湾の帰属について中国政府の言い分を理解し、二つの中国の動きを支持しないとのべているだけで、中国の見方をそのまま認めているわけではない。そのあいまいさがどういう意味をもつかを、この本は明らかにしている。

東アジアに、経済大国日本と、政治大国中国が並び立つ。これが21世紀東アジアの構図であろう。隣国である日中両国は、しかし、歴史という過去のわだかまりを払拭できず、真実の友好関係をとり結ぶに至らない。中国にとって、発展に必要な資源と資本、市場を提供できるのは、日本ではなくてアメリカだ。そこで日本は、次第に経済的地位すら低下しつづけるという、居心地の悪い状態に甘んじなければならなくなる。欧米に顔を向けていれず時代は終わった。日本とアジアの過去をふり返り、現在の緊張と将来の課題を思いえがくため、これら10冊はきっと役に立つだろうと思う。ついでに、加藤典洋と橋爪大三郎の対談『天皇の戦争責任(仮題)』(径書房、近刊)を読めば、アジアの歴史に正面から立ち向かう手がかりを手に入れることができるであろう。



090



081
 単一民族神話の起源——
 <日本人>の自画像の系譜
 小熊英二
 新曜社 1995

082
 太平洋戦争の起源
 入江昭
 篠原初枝訳
 東京大学出版会 1991

083
 昭和16年夏の敗戦
 猪瀬直樹
 文春文庫 1986

084
 昭和天皇 二つの「独白録」
 東野真
 日本放送出版協会 1998

085
 金正日への宣戦布告——
 黄長燁回顧録
 黄長燁
 萩原遼訳
 文藝春秋 1999

086
 どん底の共和国——
 北朝鮮不作の構造
 李佑泓
 亜紀書房 1989

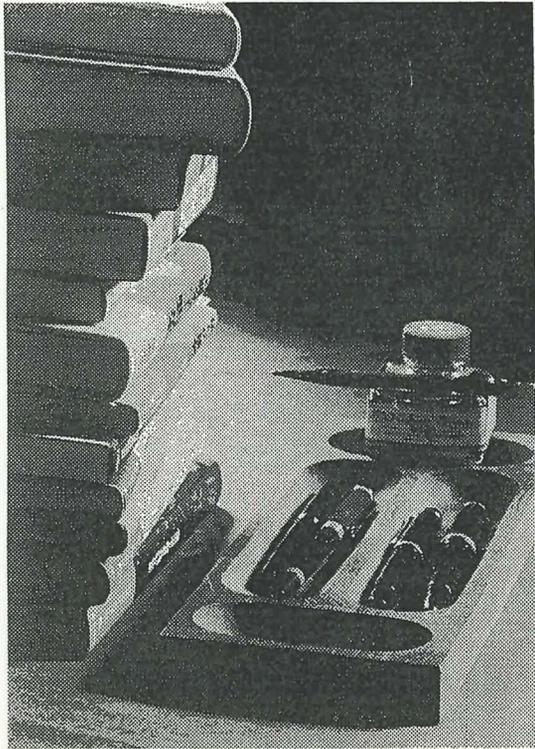
087
 北朝鮮解体新書
 恵谷治
 小学館 1997

088
 ワイルド・スワン 上・中・下
 ユン・チアン
 土屋京子訳
 講談社文庫 1998

089
 毛沢東秘録 上・下
 産経新聞「毛沢東秘録」取材班
 産経新聞社 1999

090
 台湾の命運
 岡田英弘
 弓立社 1996

印象に残った本〈全120冊〉



橋爪 大三郎

米本昌平・松原洋子・棚島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』(講談社)。丹念な資料の再発見と論理の構成により、新しい先端医療の生命操作↓おぞましいナチスの優生政策↓絶対的悪、というステレオタイプを脱却している。

佐藤俊樹『不平等社会日本—さよなら総中流』(中央公論新社)。豊富な統計的データを駆使して、戦後の平等神話のかげで知識階層の固定化が強まっている実態を指摘。時代の閉塞感の根底を突きあてつつ、胸を張れる実績社会への制度改革を提案する。

杉田敦『権力』(岩波書店)。小著ながら、ポスト・マルクス主義、ポストモダンの権力論のさまざまな展開をバランスよく俯瞰している。権力についての議論が今後積み重なることを期待できる。(はしづめ・だいぞう氏=東京工業大学教授・社会学専攻)

2000-4-7

『一冊の本』2001年1月号 朝日新聞社

2001.1.1

第6巻第1号(通巻第58号) p7-8

●特集●

二十世紀の読書

アンケート

二十一世紀に読む一冊

●橋爪大三郎

『哲学探究』

L・ワイトゲンシュタイン著/藤本隆志訳/大修館書店(ワイトゲンシュタイン全集8)

世紀末のウィーンに生まれ、ヒトラーと同じ高校に通い、第一次世界大戦の塹壕を転々として捕虜になり、ケンブリッジ大学で思索に没頭したワイトゲンシュタインは、『哲学探究』という遺稿を残した。ここで、『言語ゲーム』のアイデアが初めて明らかにされた。

科学も資本主義も革命も、何もかも愚かな空騒ぎではないのか。ダダやアナキズムなど同時代の虚無をたつぷり吸い込んだうえで、彼はその反対の答を出す。人間の営みには根拠がない。根拠がないが、その営み以上に確かなこともない。どんな絶望も懐疑も、その営み(言語ゲーム)をつき崩すことはできない。価値相対主義を乗り越え、人類の多様性のために統一を探る鍵がここにある。

(東京工業大学教授・社会学専攻)



橋爪大三郎

命名が決定的

単行本ベスト3

『パラサイト・シングル時代』

山田昌弘/ちくま新書

『不平等社会日本 さよなら総中流』

佐藤俊樹/中公新書

『日本の50年・日本の200年
日本人の自画像』

加藤典洋/岩波書店

文庫本ベスト3

『討論 三島由紀夫
vs 東大全共闘』

美と共同体と東大闘争』

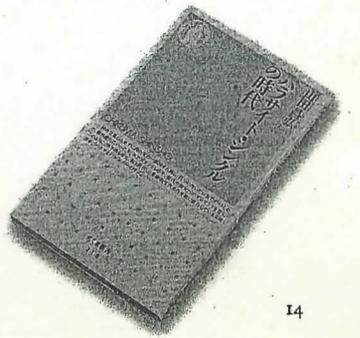
三島由紀夫+東大全共闘/角川文庫

『レヴィ=ストロース』

エドモンド・リーチ/吉田慎吾訳/ちくま学芸文庫

『世界宗教史』(1)~(8)

ミルチャ・エリヤーデ/奥山倫明+木塚隆志+深沢英隆訳/
ちくま学芸文庫



2000-4-5

若手社会学者二人の新書が、今年は注目を集めた。山田昌弘さんの「パラサイト・シングルの時代」は、独身で親と同居し、基礎消費を節約しつつ高い消費生活を享受する「寄生虫的」な若い男女約一〇〇〇万人の、実態とその社会背景を紹介する。「パラサイト・シングル」という命名が、決定的だった。名前がつけば、それに対応する現実の存在を認めなければならない。名指された人たちは、「ああ、言われちゃった。パラサイトだって。凶星だよな、どうする？」とため息をつき、落ち込んでいる。佐藤俊樹さんの「不平等社会日本」は、SSM(社会階層と移動)調査の分析にもとづき、日本社会は平等化へ向かっていると信じられてきたが、実は新たな階層格差が根づきつつあるのではないかと警告を発した。山田さんの仕事とも通じるところがあるが、戦後日本社会の神話を、統計データなど科学的な根拠にもとづいて検証しようとしている。一九九〇年代の停滞を経て、懐疑的になった読者がこうした仕事を歓迎している。

加藤典洋さんの「日本人の自画像」は、戦後日本という閉域を、ブレ近代→近代へと進む連続性/非連続性のうちに位置づけ直そうという、批評的・思想的な仕事である。「敗戦後論」(講談社)、『可能性としての戦後以後』(岩波書店)、『日本の無思想』(平凡社新書)、『戦後の思考』(講談社)といった仕事を受けて、本書では、日本という観念と意識が形成されてゆくいくつかの系譜をたどる。補助線が引かれる。戦後の言論を流通させていた暗黙の前提が、きわめてあやふやなものではなかったことが明らかになる。加藤さんの一連の仕事は注目すべきだ。この秋には、竹田青嗣さんを司会に、加藤さんと私のお厚い対決討論「天皇の戦争責任」(後書房)も出版される予定なのでよろしく。

(社会学)

悩ましくも楽しい宿題

毎年夏休みを利用して、私の勤務先である東京工業大学の学生数十人を、中国に連れて行っている。もう7年目になるだろうか。行き先は毎年違って、三峡下り、旧満洲、シルクロード、雲南、黄河流域、内モンゴル……と、中国の各地に及ぶ。

春先から、この準備で、私の研究室は旅行代理店顔負けの忙しさだ。学生の募集と履修登録。パスポートとビザの取得。グループ分けと事前学習。短期留学の手続き。格安航空券の手配。中国側との連絡。出発前説明会。中国に渡ってからの宿舎や旅行は、受け入れ機関の天津社会科学院が手配してくれるので助かるが、それでもかつうの授業の何倍も手間がかかる。

なぜそこまでするかと言えば、学生たちが異国の地を踏むことで、みるみる変化し成長していくのがわかるから。海外旅行の経験のある学生は少ない。しかし、そんな彼らも中国で数週間を過ごす、大きなショックを受ける。見かけでは日本人と区別がつかない中国人のびとが、思考や行動様式ではまったく異なる。日本と海を隔てて、想像できなかったもうひとつの世界がひろがっていた。この事実を認識することで、学生たちはかえって日本に目を開き、日本で育った自分を相対化し、大きな解放感を手にするのだ。

2001年は、中国のどんなところを巡ろうか。悩ましくも楽しい宿題だ。

青弓社・新訳『親族の基本構造』 by レヴィ=ストロース
推薦文

レヴィ=ストロースが博士論文『親族の基本構造』を執筆したのは、亡命先のニューヨークだった。ブラジルでの調査データを踏まえつつ、図書館で丹念に親族研究のモノグラフを読んでいく。作成した図書カードは六千枚にもものぼるといふ。

祖国から逃げのび、マルクス主義からも機能主義からも距離をおき、孤立無縁のなかで続けた探索のはてに、未開とみなされてきた親族現象のなかに、人間的な合理性のほたらき(野生の思考)を見いだすことができるという直観に到達する。人類学者としてのレヴィ=ストロースの理性と野生を生きる人びとの集合的な思考とが、同じ実態(≪構造≫)をもつゆえに共鳴しあう。≪構造≫主義の誕生である。西欧文明が、非西欧の植民地や第三世界に対して、知的・道徳的な優位を誇っていた自信満々の態度が、根拠のない偏見、「自民族中心主義」であるとして、批判され告発される。こうして地すべりの生じた知の断層が、現代思想の地平をかたちづけた。ラカンもフーコーも、デリダもドゥルーズ=ガタリも、レヴィ=ストロースの天才的な洞察と力業なしには、あれほどやすやすとポスト・モダンの場所に立つことができなかったろう。

『親族の基本構造』そのものは、試行錯誤を重ねつつ書かれた学術論文なので、人類学の基礎知識や、オーストラリア、中国、東南アジアの民族誌が、多少なりと頭に入っていたほうがわかりやすいのは確かである。けれども、まったく専門外の読者が読んだとしても、冒頭の10章までや、オーストラリアの婚姻クラス分析、交叉イトコ婚の意味づけのあざやかさなどは、このうえない知的興味をもって読み進めるはずである。

本書に続けて、レヴィ=ストロースは、『構造人類学』『野生の思考』『神話論理』(全4巻)と、続けざまに重要論文を世に問うていく。それら(の一部、または紹介)を読んだ、構造主義を理解したつもりになり、論評する人びとも多い。しかし、構造主義の原点は本書なのであり、本書を読まないうちは、レヴィ=ストロースの魂のありかはわからないはずだと私は言いたい。

(はしづめ だいさぶろう・東京工業大学教授・社会学者)

20世紀を代表する知の巨人
レヴィ=ストロースの
猛々しい産声が、
新世紀を迎えるいま、
新たな衝撃をよみがえる。

Les Structures élémentaires de la parenté
Claude Lévi-Strauss
親族の基本構造
クロード・レヴィ=ストロース
橋井和典 訳
青弓社

